

丘の銅像

新美南吉

青空文庫

丘^{おか}のふもとの、うつくしい平和な村に、ハンスという、詩人^{しじん}が
住んでいました。

丘^{おか}の上に立って、うつくしい村をながめては、歌にうたい、牧^ま
場^{きば}にいつて、やさしいひつじのむれをながめては、詩^しをかくのが
つねでした。ハンスのつくった詩は、国じゆう、だれひとり知ら
ないものはないほどでした。

あるとき王さまは、この村のそばを通りかかりましたが、ハン
スがこの村にいと聞いて、わざわざ、この名高い詩人^{しじん}に、あい
にこられました。王さまでさえ、そんなに、ハンスをたいせつに
思っていられるのですから、村の人たちが、ハンスをうやまつた

ことは、いうまでもありません。そんなわけですから、このハンスが年とつて、天国へめされていったときには、村の人たちは相^そ談^{うだん}をして、ハンスをいつまでもわすれないように、銅^{どうぞう}像^{ぞう}をたてることにきめました。

三か月ほどのち、丘^{おか}の上のにれの木の下には、りっぱなハンスの銅^{どうぞう}像^{ぞう}がたちました。ちょうど、ハンスと同じ高さで、顔から形から、生きてるときの、ハンスそっくりでした。村の人たちは、その銅^{どうぞう}像^{ぞう}を見あげては、生きてたときのハンスが、牧^{まき}場^ばのさくのそばで、ひつじのむれをいつまでも、じつと見つめているすがたを思い出すのでした。

ながい年月がたちました。

ハンスの生きていたころ、まだ、ほんのあかんぼうだった人たちが、今はもう、かみの毛が雪のように白くなって、まごたちのおもりをしていました。まごたちのおもりをしながら、ハンスがつくった子守歌こもりうたをうたっていました。まごたちが「むかしばなし」をせがむと、その老人ろうじんたちは、ハンスの話をして聞かせるのでした。

それからまた、ながい年月がたちました。もう村には、ハンスのことを知ってる人は、なくなってしまうました。けれど、丘おかの上にはまだ、ハンスの銅像どうぞうが村のほうを見おろして、ほほえみながら立っていました。

ある日、村の百しようがひとり、教会へ行ってほくし牧師さまに、こ

うたずねました。

「丘おかの上に立つてござらっしゃるお方は、いつたい、どなたでござんしょう。」

すると年とつた牧師ほくしさまは、

「あれはハンスといつてな、わしのおじいさまのおじいさまが生きてござらっしゃったときより、もつといぜんに、村に住んでいらっしゃった、えらい詩人しじんじや。」

と、答えました。

そのころ、その国では、わるい伝染病でんせんびょうがはやっていました。伝染病は丘おかの下したのうつくしい村へも、くろい大きな鳥のかげのよように、やってきました。村の人たちは、どんどん、死んでいきま

した。もしも、ヘンデルという、えらいお医者いしやさんが、一生けんめいにはたらいてくれなかつたら、村の人たちは伝染病でんせんびょうのため、ひとりのこらず、死んでしまったかも知れません。このヘンデルが、伝染病のばいきんを見つけてくれたので、村の人たちは、病気からすぐわれるようになりました。村の人ばかりでなく、国じゅうの人がすぐわれました。そこで、村の人のよろこびようといったら、ありません。

ところが、そのよろこびのまつさいちゆうに、ヘンデル先生は、ふとした不注意から、ばいきんが目にはいり、それがもとで、死んでしまいました。

村の人たちは、あつまつて相談そうだんしました。

「ヘンデル先生のようなえらい方は、いつまでもわすれてはいけない。」

「ヘンデル先生の銅像どうぞうをたてておこう。」

そこで、ヘンデル先生の銅像どうぞうをたてることにきめました、
なにしろ、伝染病でんせんびょうという大きいなんのあとだから、村はびんぼうになってしまつて、だれもお金を出すものがありません。お金がなくては、銅像をたてることができませんで、村の人たちがこまっていると、くつ屋のじいさんが、

「それじゃあ、あの丘おかの上に立つてる銅像どうぞうを、あのまま、ヘンデル先生の銅像にしてしまつたらどうだ。」
と、いいました。

村の人たちは、なるほど、これは名案めいあんだと思いました。これなら、ちつとも、お金がいりません。それに、あの、だれだかわけのわからない銅像どうぞうなんか、なくなつたほうがいいのでした。一週間ほどすると、丘おかの上の銅像どうぞうのあごに、あごひげがくつつけられました。ヘンデル先生は、あごひげをもつていたからでした。村の人たちは、その銅像を見あげては、沼ぬまのほとりで、薬やく草くそうをさがしていたヘンデル先生のことを、しみじみ、思い出すのでした。

十年にひとりぐらいは、村で、わるい伝染病でんせんびょうにかかるものがありました。村の人たちは、ヘンデル先生の教えてくれた薬やく草くそうを、さつそくせんじて、病人にのませました。すると病人は、

二、三日のうちに、なおつてしまうのでした。村の人たちはこの薬草を、ヘンデル草とよぶようになりました。

ヘンデル草は、春になると青い芽めをふき、秋になるとかれています。ききました。そうして、なん十年か、なん百年か、すぎさりました。

丘おかの下のうつくしい村は、むかしのとおりの、小さな村でした。

けれど、村の人たちは、もうすっかり、かわってしまいました。ヘンデル先生のことを知ってる人は、もう、いなくなりました。ヘンデルといえ、すぐ草のことを思い出すばかりで、丘の上の、ひげをはやした銅像どうぞうのことも、むかしのヘンデル先生のことも、思い出すものはありませんでした。

しかし銅像どうぞうは、むかしとちつともかわらずに、にれの木のか

げに、ぼっそり立って、村のほうにほほえみかけていました。

そのころ、この国ととなりの国とが、はげしい戦争せんそうをはじめました。村からも、じょうぶなわかものたちが、おおぜい、戦争に出ていきました。けれど戦争は、なかなかはてませんでした。

となりの国は、この国より大きくって、新しい兵士へいしを、どんどん戦争せんじょうへ送ってよこすので、この国のほうは、だんだん、負け

ぎみになってきました。おおぜいの兵士たちが、大きなばくだんの下で、紙つきれをふつとばすように、いちどにたおれたりしました。しかし、こうしてこの国のほうが、負けそうになっていたときに、ペテロという、ひとりの馬にのったわかい指揮官しきかんが、めざましいはたらきをしたおかげで、みかたは元氣をもりかえし、

とうとう、敵をうちやぶってしまいました。

しかしペテロは、戦いのあと、馬とともに死んでいるのが発見されました。ペテロ、ペテロと、わかいペテロは、いちどに有名になってしまいました。このペテロは、ほかでもない、丘の下のおつかしい村から、戦争にいったわかものたちのひとりでした。

みかたの勝利が、ペテロのおかげであつたということが村に知れると、村では、大きわぎがはじまりました。そして、今か今かと、ペテロや、ほかのわかものが、がいせんしてくるのを、まっています。

丘の上の銅像のところに見はりが出て、遠くのほうを、目をほそくして見ていました。けれど、その見はりの目にも、ついに、

わかものたちががいせんしてくるすがたは、うつりませんでした。そして、ある夕方、よわよわしい赤い夕日の道を、ながいかげをひきながら、松葉杖まつばづえにすがって、ちんぎりちんぎり、やってくるひとりの男のすがたが見えました。これは、村から戦争せんそうにいったわかものひとり、居酒屋いざかやのむすこでした。

この居酒屋いざかやのむすこから、「戦争せんそうにいった村のわかものは、みんな戦死せんししてしまった。ペテロも戦死してしまった」と聞いたとき、村の人たちは、かなしい芝居しばいを見たあのように、首をふつて、ささやきあうばかりでした。

「ペテロのおかげで、わが国は勝ったんだ。ペテロは、わが国の英雄えいゆうだ。」

「ペテロの銅像どうぞうを、つくろうじやないか。」

「おお、そうだ。」

と、村の人たちはいいいいしました。

しかし、ペテロの銅像どうぞうには、ぜひ、馬が必要ひつようでした。なぜ

なら、ペテロは馬にのって、戦場せんじょうにかつやくしました。そし

て、馬といっしよに、死んでいました。しかし、もし、馬にまた

がったペテロの銅像をつくるとなると、費用ひようがたいへんで、とう

てい、そんなにたくさんのお金は、あつまらないにきまっています

した。そこで小学校の先生が、すばらしいことを考え出しました。

それは、丘おかの上にたっている銅像どうぞうを、そのままペテロにして、

馬だけを、新しくつくるということでした。みなさんは、そんな

考えなら、なにもおどろくほどでもない。ハンスの銅像をそのまま、ヘンデル先生にしたのと同じようなことじゃないかと、お考えでしょう。しかし、今の村の人たちは、むかし、そんなことがあつたとは、ちつとも知らないのです。ヘンデルも知らなきや、ハンスも知りません。ましてハンスの銅像が、ヘンデル先生の銅像になつたことなど、知ろうはずがありません。

さてそこで、村人一同は、小学校の先生の考えどおりにすることにして、まず、馬をつくるために、村じゅう、一けん一けん、きふきん寄付金をあつめにいきました。

「ペテロのおかげで、わが国は勝ちました。ペテロは戦死せんししました。馬といっしよに、戦死しました。ペテロは、なんとという、え

らいわかものでしょう。ペテロの銅像どうぞうをつくるために、お金を寄付きふしてください。」

といいながら、一けん一けん、まわりました。人びとはよろこんで、お金を寄付きふしました。

しかし、村人のなかには、戦争せんそうのために、じぶんのむすこをうしなつた親たちが、たくさんいました。その親たちのところへ、お金の寄付きふをたのみにいくと、親たちは、ぶんぶんしていうのでした。

「なんだ。ペテロ、ペテロって。ペテロひとり、国のためになつたと思つてるのか。うちのむすこだつて、りっぱに戦死せんししたんだぞ。馬といっしょに死んでいたつて、それがどうしたというん

だ。馬にのつてりや、それだけらくなわけだ。うちのむすこは、馬にもものせてもらえず、足をぼうのようにすりへらして、あげくのはて、戦死したんだぞ。うちのむすこの銅像どうぞうでもたてるとうなら、いくらでも金を出すが、ペテロなんかの銅像に、一文いちもんだって出すもんか。」

そんなわけで、はじめに考えたほど、たくさんのお金があつまりませんでした。だから、はじめは、ほんとうの馬と同じ大きさの馬をつくるつもりだったのが、犬ぐらいの大きさのものしか、つくれないことになってしまいました。

ひと月ほどもすぎますと、丘おかの上には、ふしぎな銅像どうぞうができました。一ぴきの、小さな馬をまたいで立っている、わかい軍ぐんじ

人の銅像でした。馬が小さくて、人間が大きいので、馬はまるで、人間のまたの下をくぐっている犬のように見えました。

わかい軍人は、ヘンデル先生から、いつぺんにかわってしまった、ペテロでした。ペテロにはあごひげがなかったので、ヘンデル先生のおごひげは、けずりとられてしまいました。そのかわり、軍人らしいカイゼルひげを、ぴんとはやしていました。

村人たちは、朝ぼん、その人間と馬との銅像を見あげては、砲火のみだれとぶなかを、馬のしりにむちをくれながら、

「すすめ！ 祖国のために！」

ときけんでいる、ペテロの心を思いうかべ、「おお、神よ」といつて、朝飯や夕飯にとりかかるのでした。

ペテロの命めい日は、十月四日でした。その日になると、毎年、村の人たちは仕事をやめて、教会にいったり、聖書せいしょを読んだりするのでした。その日を、ペテロの日といたしました。

そしてまた、ひじょうにながい年月が流れ去ったので、ペテロのことは、門にうたれた一本のくぎのように、わすれられてしまいました。小学生は学校で、先生から「ペテロというえらい人が、むかし、たいへんりっぱなはたらきをして、みかたに大勝しょうり利をもたらしした」ということを、教わりました。そこである日、先生につれられて、丘おかの上へ遠足にきたとき、小学生のひとり、これの木かげの銅像どうぞうを指さして、

「先生、この人が、ペテロじゃないでしょうか。」

と、たずねました。

「こんなペテロが、あるものか。ペテロは、こんな犬にまたがつて、ニヤニヤとわらっているような、へんてこな軍人ぐんじんじゃない。アレキサンドル大帝たいていのように、どうどうとしているのだ。」
と、先生は教えました。生徒は、先生のいうことが、もつともだと思いました。

ペテロのことは、わすれられてしまいました。村人のあいだには、まだ「ペテロの日」というのが、のこっていました。それはちようど、ハンスやヘンデルがわすれられてしまっても、まだハンスのつくった子守歌こもりうたや、ヘンデル草がのこっているようなものでした。

十月四日になると、村人たちは、「ペテロの日」といって、仕事を休みました。水車はそのにぶい音をやめ、馬車屋は村のはずれで、角笛つのぶえをふくのをやめるのでした。

けれど、なぜ、この日をペテロの日というのか、それを知っている人は、ひとりもありませんでした。村でいちばん、ものしりのほくし牧師さんでさえ、それには、あやふやでした。人にきかれたときには、たぶん、むかしペテロというキリストさまのお弟子でしが、ギリシアへ伝道でんどうに出発した日であろうというのでした。

あるばん、村じゆうがねしずまったところに、霧きりのおくで、一匹きの犬が、ぼうぼうとほえつづけました。朝になると、さく夜、村でいちばん金持ちの地主さんのやしきに、おしいり強ごうと

盗^うがあつたことがわかりました。強盗はひとりでした。カイゼルひげをはやした、ものすごい男で、火のきえたえんとつから、サンタクローズのようにはいつてきたので、顔が銅^{どう}像^{ぞう}のように見えました。強盗は、地主さんの寢^{しん}室^{しつ}のドアを、コツコツとたたきましたので、地主さんは、女中でもなにか用事があつてきたのかと思つて、知らんふりしてねていました。

「ところが、あにはからんや、それが強^{ごう}盗^{とう}でした。」
と、地主さんは、あとで村の人たちに話しました。

強^{ごう}盗^{とう}は、地主さんから札^{さつ}たばをうけとると、こんどはげんか
んから出ていきましたが、そこで地主さんのゆうかんな番犬、ナ
ハトに見つかつてほえつかれたので、すっかりあわててにげし

ました。が、犬はなおも追っかけましたので、強盗はついに、それをけころしてにげのびました。忠実な番犬ナハトは、じぶんのいのちをうしなつてまで、強盗をとらえようとしたのでした。

地主さんは、すっかり、感激かんげきしてしまいました。あのとときの

強盗ごうとうが、銅像どうぞうに似てにいたことから思いついて、地主さんはぜ

ひ、忠犬ナハトのために、銅像をたてたいと思いました。そこで、村の人たちに相談そうだんをかけてみると、村の人たちも、それはもつともなことだ、そんなすばらしい番犬は、あとあとの代まで、かたりつたえるべきであると思ひました。

「そこでみなさん、ものは相談そうだんだが。」

と、地主さんは村の人たちについていふのでした。

「あの丘おかの上に立っている、あの、わけのわからぬ銅像どうぞうじゃが、あれをわたしに、まかせてくださいませんか。すればわたしが、そのあとに、忠犬ナハトの銅像をたてますから。」

村人たちのなかには、すぐ、ははあ、よくふかの地主めが、あの銅像どうぞうをつぶして、その銅でつくるつもりなんだなと思いましたが、地主からは、田や畑をかりているので、反対でもして、もし田畑をかえせといわれたら、それこそたいへんですから、だまって、うつむいていました。

ひと月ほどあとの、ある日、丘おかの上に、忠犬の銅像どうぞうができあがったというので、村人たちは市日のように、いそいそと、丘おかの上にあつまっていきました。銅像どうぞうには、まっ白きれな布が、すっば

り、かぶせてありました。村人たちはそれを見て、犬にしては大きいと思いました。

やがて地主は、えんび服ふくをきて、シルクハットをかぶって、かた手に竹のむちを持ち、銅像どうぞうの台の上にあらわれました。そしてパラリと布きれをとりさると、犬ばかりではなく、強盗ごうとうまでが銅像になつていました。

「さて、心のうつくしい村人たちよ。」
と、地主さんは村人たちにむかつて、いいました。

「わたしは、あの夜のありさまを、はつきりとあらわすために、また、忠犬ナハトがどんないさましいはたらきをしたかをしめすために、強盗ごうとうも銅像どうぞうにきざみました。よく、ごらんください。

これが強盗です。ものすごい顔をしています。かくのごとき、カイゼルひげを、ぴんとはやしていたのであります。」

といって、地主さんは、むちのさきで、カイゼルひげをしめしました。村人たちは、

「ほーう、おそろしいやつですね。まるで、悪魔あくまですね。こんなものすごいひげは、見たことがない。」

と、ペテロのひげを見て、ささやくのでした。この強盗ごうとうは、まえのペテロの銅像どうぞうでした。

「これを、よく見てください。これがわたしの愛犬にして、しかも忠犬なる、ナハトであります。このゆうかんなるありさまは、どうですか。今まさに、強盗ごうとうの足にくいつこうとしています。」

よく見てください。これが目です。これが耳です。これが前足で、これがあと足です。」

村人たちは、強盗ごうとうの横からとびかかっているナハトのすかたに、見いつていました。

「みなさん、ナハトはまったく、よい犬でした。足がほそく、首はぴんとしていました。」

といって、地主がむちでさししめした首のところには、まだ、たてがみがのこっていました。それはペテロの馬に、すこし、手をくわえたものだったのです。

「そして、さいごにみなさん、このまえは、あまりにわたしがのぼせあがっていたために、みなさんに、お話しするのをわすれて

しまっていたことを、今ここで、お話ししなければなりません。

それは、わたしがいたずらに、金をとられただけで、だまっていなかったということです。みなさん、一歩まえにすすんで、目を見はつて、よく見てください。この強盗ごうとうのひたいを。」

ペテロのひたい、今は強盗ごうとうのひたいに、深さが五センチメートル以上もあつて、あきららかに、致命的ちめいてきな長いきずが、ぐつと、くいこんでいました。

「わたしは、金をわたしながら、左手にかくし持っていたおのもつて、ガンとひと打ち、強盗ごうとうのひたいにくれてやったのでした。」

こうして、忠犬ナハトの銅像どうぞうは、丘おかの上に立ちました。それ

からというものは、村ではよい犬のことを「ナハトのような犬」と、よぶようになりました。

けれど、こうした忠犬ナハトや、強盗ごうとうや、地主さんの記憶きおくも、ながい年月の流れには負けてしまうのでした。いつのまにか、そうしたもの記憶は、村人の中から、月夜のかげのように、きえていきました。ただ、「ナハトのような犬」という、ことばだけがのこりました。けれど人びとは、ナハトがいつたい、なんのとやら、いっこうに知りませんでした。また、知ろうとも思いませんでした。それはちようど、ハンスの子守歌こもりうたや、ヘンデル草や、ペテロの休日と、同じようなものでした。

村の教会は、村じゅうの建物たてももののうちで、いちばん、古いもの

になりました。ステンド・グラスはすすけ、天上のキリスト降こうた誕んの壁画へきがのそばには、古いつばめのすが、へばりついていました。塔とうの階段かいだんも、あまりひどくきしむので、だれもきみわるが
つて、のぼらなくなりました。そこである年、村人たちは、教会をたてなおそうという、相談そうだんをしました。そのころ、村はかなり大きくなっていて、大むかし、ヘンデル先生が薬草やくそうをさがしていたあたりまで、家ができていました。そしてまた、村人たちは、なが年の平和で、たいへん、ゆたかになっていました。

そこで相談そうだんの結果けつか、新しい教会を、丘おかの上の銅像どうぞうのあるところころに、たてることになりました。

あやしげな銅像どうぞうは、とりのぞかれることになりました。が、

まったく、すてられたわけでは、ありませんでした。というのは、塔とうにつるす鐘かねをつくるのに、この銅像どうぞうを、つかうことになったからでした。

銅像どうぞうは、馬のひく荷車おかにのせられて丘おかをくだり、となり村の鑄物師いものしのところまで、ごとごとと引かれていきました。鑄物師いものしのところごうとうで、強盗ごうとうと忠犬ナハトは、一つのるつぼの中にたたきこまれて、一つにとけあつてしまいました。そして、それから七つの、そろいの鐘かねがつくられました。

はじめ、詩人しじんハンスであつた銅像どうぞうは、医者いしやのヘンデル先生にかわり、つぎは軍人ぐんじんのペテロにかわり、つぎには、おそろしい強盗ごうとうにかわり、ついには、とけて七つの鐘かねになりました。そし

て、丘^{おか}の上に、りっぱな教会がたつて、その塔^{とう}の上につるされたとき、七つの鐘は、うつくしい音をひびかせて、村人たちの心に、神の国をおもわせたのでした。

青空文庫情報

底本：「新美南吉童話全集第一巻 ごんぎつね」大日本図書

1960（昭和35）年6月20日初版発行

1975（昭和50）年5月10日31版発行

入力：江村秀之

校正：小林繁雄

2013年7月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

丘の銅像

新美南吉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>